RIRC
宗教情報リサーチセンター

（公財）国際宗教研究所　宗教情報リサーチセンター

20周年記念誌・国内

→デジタル版公開ページ　http://www.rirc.or.jp/20th/20th.html

＊印刷してご利用の際は 2 頁目以降を印刷して下さい。

本プロジェクトの視座

井上順孝

はじめに

本書及び『海外における日本宗教の展開』は、宗教情報リサーチセンター (以下、RIRC) の開設 20 周年記念の刊行物である。編集・刊行のためにプロジェクトを組織したが、これまでに行ってきたセンターでの活動もまた、今回の成果の見えない土台になって存在している。さらに本書は今後の当センターの研究活動や研究発信の足場となることも目指している。そこで、これまでの活動が本書にどう関わっているか、そして今後どのような活動を構想しているかについて以下で述べたい。

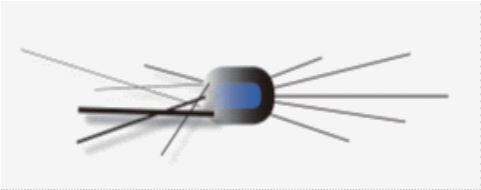
1. これまでの活動が築いたもの

RIRC は 1998 年 11 月に開設されたが、その翌年の 1999 年 11 月に国際宗教研究所主催の公開シンポジウム「インターネット時代の宗教」が開催された。会場はその当時 RIRC が置かれていた伝通院・繊月会館（東京都文京区）であった。発足当初の RIRC の研究員であった人たちには、このシンポジウム開催に際して全面的に協力してもらった。シンポジウムにおけるもっとも重要なテーマは、インターネットが普及していく中に、宗教界そして宗教研究にどのような影響がもたらされるかであった。RIRC の事業の方向性を考える上でも、大変興味深い内容であった。このシンポジウムの様子は、翌 2000 年 4 月 5 日にスカイパーフェク TV のチャンネル 216 で、2 時間に編集されて放映された。放映された内容はデジタル化されているので、RIRC で視聴可能である。

シンポジウムで議論されたことに基づいて、国際宗教研究所委員会編・井上順孝責任編集『インターネット時代の宗教』（新書館、2000 年）が刊行された。同書は韓国の研究者の関心も惹いたようである。姜容慈［カン・ヨンジャ］氏によって、そのままのタイトル（『인터넷 시대의 종교』）で 2005 年に韓国語に翻訳され刊行された。

(1)『ラーク便り』における発信

RIRC はオウム真理教による地下鉄サリン事件を契機に生じた宗教界の危機感を反映する形で、国際宗教研究所の事業として開設されたので、正確な宗教情報の発信ということは当初から重要な課題として存在していた。最新の宗教ニュースについての紹介は、最初は国際宗教研究所の季刊のニュースレターの一角に「ラーク便り」として掲載されていた。2000 年 10 月からは『ラーク便り』として宗教情報リサーチセンター刊行の独立した季刊誌になった。非常に複雑な宗教情報を少しでも整理した形で発信しようという意図は、実は『ラーク便り』の表紙の右の図柄に密かに示されている。



『ラーク便り』の主な内容は、専門紙、一般紙や雑誌の国内宗教記事、国外宗教記事、そして宗教専門紙に掲載されている書評リストの紹介であり、これは一貫している。その他、研究員による論文や研究ノート、エッセイ等も掲載している。なお、論文、研究ノート類は現在ではオンラインでダウンロードできる。『ラーク便り』というタイトルだと内容が分かりにくいということで、2018 年 5 月刊行の第 78 号から、サブタイトルを付して『ラーク便り―日本と世界の宗教ニュースを読み解く』とした。

ここに掲載される専門紙及び国内外の宗教記事は、現在は株式会社 CSI ジャーナル社（東京都千代田区）の社員が、記事の選択と切り抜き作業等を行なった上で作成したデータベースを利用している。毎月数千件ときに 1 万件を超える記事数になる。これをもとに、多くの人が知って欲しい記事を研究員が選んでいくのである。地道な作業であるが、そこで蓄積されたものは、時とともに重要度を増していくと考えている。

(2) 研究員の成果発信

こうした作業を重ねながら得られた知見を参考にしながら、研究員が宗教専門紙『中外日報』に連載した記事がある。それが 2002 年 4 月から 2003 年 4

月まで、宗教専門紙の『中外日報』に「IT 時代の宗教を考える」というテーマのもとでの小論である。これは 2003 年に『IT 時代の宗教を考える』として一冊の本にまとめられ、法蔵館から発売された。その内容は以下のとおりである。

井上順孝「何が変わりつつあるか」
浅川泰宏「宗教系サイトの現状」
田村貴紀「誰が宗教情報 HP を見ているか」
弓山達也「HP は教団活動の代わりになるか」
小池靖「並列的に存在する情報」
井上順孝「業者任せは逆効果も」
井上順孝「双方向性への対応が必要」
田村貴紀「個人から個人へのメッセージ」
小池靖「掲示板とメーリングリスト」
日平勝也「響き始めた少数派の声」
吉永敦征「選別、階層化されている情報」
浅川泰宏「マージナルな福音」
佐藤壮広「痛みを交換、共有する動き」
弓山達也「宗教研究者と宗教者との双方向性」
井上順孝「宗教と非宗教のボーダーレス化」
吉永敦征「HP を開設する二つの方法」
黒﨑浩行「電子認証」
永崎研宣「訴求力アップへ」
井上順孝「IT 革命という挑戦の本質」
この書は黒﨑浩行氏を除いて、当時の RIRC の研究員が執筆した。

また RIRC はオウム真理教事件を契機に設立された経緯もあるので、オウム真理教に関する資料の収集整理とそれに基づいた研究成果を刊行することは、当初の大きな目的の 1 つであった。これは「A 資料プロジェクト」と命名され、長期にわたる資料の整理と分析がなされた。この成果は 2 冊の書籍となって刊行され、オウム真理教問題をきちんと考えようとする人たちにとっては、必読の書になっているという自負がある。2 冊の書籍に掲載された論文は次のとおりである。

『情報時代のオウム真理教』（春秋社、2011 年）

井上順孝「地下鉄サリン事件以前のオウム真理教」
藤田庄市「オウム真理教事件の源流―シャンバラ王国幻想から無差別大量殺人への道程」
高橋典史・宮坂清「教団の映像メディア利用―教祖・教団のイメージはどう創出されたか」
矢野秀武「オウム真理教ラジオ放送における教化・布教・広報」
碧海寿広「麻原彰晃の「対機説法」―オウム真理教「説法テープ」の内容と分析」
藤野陽平「「オウム音楽」の多層性―「ショーコー・ショーコー」の奥に潜む世界観」
塚田穂高「オウム真理教が社会に向けて刊行した書籍」
弓山達也「オウム真理教における説法の変遷―基幹機関紙を中心に」
平野直子「教本類からうかがえる教学内容」
隈元正樹「新聞報道の中のオウム真理教」
平野直子「オウム真理教と雑誌報道」
小島伸之「テレビが報じたオウム真理教」
塚田穂高「事件前の「オウム論」書籍と学術研究―ジャーナリズムから宗教研究まで」
塚田穂高「真理党の運動展開と活動内容」
藤野陽平・高橋典史「オウム真理教の試みたさまざまな事業」
小池靖「森達也監督・映画『A』『A2』をめぐって」
小宮ひろみ「オウム真理教からの脱会者たち」
辻隆太朗「オウム真理教と陰謀論」
井上まどか「ロシアにおけるオウム真理教の活動」
渡辺学「国外のオウム真理教の活動」
井上順孝「宗教法人解散とアレフ・光の輪」

この書の執筆者は、小宮ひろみ、辻隆太朗、渡辺学の 3 氏以外は、RIRC の当時の研究員と元研究員である。

『オウム真理教を検証する』（春秋社、2015 年）

藤田庄市「麻原言説の解読」

高橋典史「引き返せない道のり―なぜ麻原の側近となり犯罪に関与していったのか」
藤野陽平「疑惑を押しとどめるもの―脱会信者の手記にみるウチとソトの分岐点」
井上順孝「科学を装う教え―自然科学の用語に惑わされないために」
矢野秀武「暴力正当化の教えに直面したとき―何をよりどころに考えるか」
平野直子・塚田穂高「メディア報道への宗教情報リテラシー―「専門家」が語ったことを手がかりに」
井上順孝「学生たちが感じたオウム真理教事件―宗教意識調査の一六年間の変化を追う」
井上まどか「今なおロシアで続くオウム真理教の活動―日本とロシアの並行現象―」
特別寄稿　高橋シズヱ「地下鉄サリン事件遺族の二〇年」
塚田穂高・杉内寛幸「宗教事件年表」

この書の執筆者は、特別寄稿をお願いした高橋シズヱ氏以外は、すべてRIRCの当時の研究員・元研究員である。

(3) 10周年記念フォーラム

RIRC設立から10周年を迎えた2008年には、それを記念するフォーラムを開催した。11月2日に国学院大学の有栖川宮記念ホールで、「＜宗教情報＞とメディアリテラシー」をテーマとして、4時間半にわたって開催された。これはRIRCの活動が、関係者や社会からどのように受け止められ、またどのような期待が生じているかを確認するという意味も持っていた。約120名の参加者により、充実した内容の議論が交わされた。

登壇者は下記のとおりであるが、きわめて具体的な事例が報告され、また宗教について報じるメディアのあり方への批判も出された。そうした中に、RIRCがどのような役割を果たしうるのかを再考する機会となった。なお、このフォーラムの様子は、2009年1月22日と30日の2回、スカイパーフェクTV216チャンネルで1時間にわたって放映された。これもデジタル化されているので、RIRCで視聴が可能である。

フォーラム登壇者（肩書は当時）

岡部高弘（創価学会副会長）「創価学会のメディア対応について」

高橋直子（番組制作リサーチャー）「＜スピリチュアル＞なバラエティ番組が孕む諸問題」

西浦恭弘（真如苑・宗教情報センター長）「宗教情報データベース作成に関わって見えてくること」

本山一博（玉光神社・権宮司）「人々の心に潜む霊能や神秘現象への根拠のない期待に応えるメディア」

山口貴士（弁護士）「信仰を持たない自由、信じさせられない自由」

弓山達也（大正大学教授・宗教情報リサーチセンター研究員）「宗教界と市民をつなぐ―宗教研究ができること―」

渡辺直樹（大正大学教授・元週刊ＳＰＡ！編集長）「マスメディアの『宗教』の取り上げ方」

司会　井上順孝（国学院大学教授・宗教情報リサーチセンター長）

2. 今後の展開

本書を含む今回の２冊の書籍の刊行の目的は、それぞれ「はしがき」と「あとがき」に述べてある。そして２冊の書は、今後の RIRC 及びその関係者によるさらなる展開への礎石の一つになることを意図している。電子書籍としても刊行しているのは、そのことに関係している。情報化時代、デジタル化時代には、これまでとは異なる研究成果発信のあり方もさまざまに模索していかなければならない。

ことに現在はネット上に、宗教や宗教文化に関する信頼のおけない情報が無数にあり、意図的に間違った情報を流そうとしているサイトもある。「悪貨が良貨を駆逐する」とでも言うべき状態である。しかし、そうした類のものが将来なくなっていくということはありえない。多くの人の情報リテラシーが向上したとしても、それは望めそうにないのである。そうしたやや悲観的な状況の中で、研究者としてとるべき方策の一つは、正確で信頼のおける資料、データ、情報を、できるだけアクセスしやすい形で公開することである。そして良質な情報を発信している機関、組織、あるいはグループと、相互の信頼に基づいたネットワー

クを形成していくことである。

象牙の塔に閉じこもっている研究者が情報時代にも依然として存在する。そのこと自体を批判はできないが、そうした人びとが見出した研究成果も、できるだけ分かりやすく、そしてアクセスしやすくしていく努力を、似たような分野の研究者が行うことは可能である。そうでないと、出鱈目な情報がネット上を席捲するという事態は、いっそう進行する恐れがある。

(1) データベースの蓄積と展開

RIRC のホームページでは、すでにいくつかのデータベースを構築して無料で公開している。本書の作成に当たっても、これらを利用している。オンラインでアクセスできるものについて、簡単に紹介する。

・教団データベース

2019 年 2 月時点で 346 件の教団の基本情報がある。ここに掲載された内容は各教団に問い合わせた上で掲載した情報なので、教団の公称の発表内容ということになる。信者数の正確さは保証されていないが、信者数自体がたいていの場合正確な把握が困難である。定義が統一されていないし、実情の把握は教団でも困難である。しかし、教団の沿革、現状などについての概要についての、教団側の公式見解は分かるので、これと研究書等を合わせ読めば、多面的な理解が可能になる。

・『ラーク便り』データベース

『ラーク便り―日本と世界の宗教ニュースを読み解く』は会員への頒布であるので、会員でないと読めない。しかしそこに記載された宗教関連のニュースは、広く知ってもらうべきことが多い。専門紙のニュース、国内ニュース、および国外ニュースについて、発行時より 3 年以前の記事をキーワードで検索できるようにした。また 2018 年 1 月より開始した RIRC の公式ツイッター（https://twitter.com/rirc_2018）では、【宗教・今日は何の日】というテーマで、過去の記事から同月同日の重要な記事を選んで紹介している。

・宗教記事年表

『ラーク便り』に掲載されたものから重要と思われる出来事を、担当した研究員が選んで、相互のチェックを経た上で年表形式にしてアップロードしている。

国内編と国外編とに分けてある。

・宗教系の学校のリンク集

小学校から大学まで宗教系の学校のリンク集を作成している。その学校のホームページへのリンクもあるので、現在の日本の宗教系の学校の様子を知る上ではきわめて便利である。これは國學院大學日本文化研究所編・井上順孝監修『宗教教育資料集』（すずき出版、1993 年）に掲載された情報を基本に、新たに RIRC の歴代の研究員が調べてきた情報によって追加更新しているものである。ただし、諸々の理由により、リンクは許可を得られなかった学校もあるので、これ以外にも若干の宗教系の学校があることは補足しておきたい。

・研究員の論文等

現在の研究員及び元研究員が学術誌に発表した論文のうち、公開可能なものについて個別にダウンロードできるようになっている。また『ラーク便り』に掲載された論文、研究ノート、小特集についても、個別にダウンロードできるようになっている。

なお、RIRC には 3,000 冊を超える宗教関連の研究書と、教団機関誌等はそれ以上ある。これらは会員でないと閲覧できないが、どのような刊行物があるのかについては、部分的にオンラインで、公開している。

（2）今後の情報発信

これまで構築してきたデータベースは、さらにバージョンアップを続けるが、それとともに、本書の刊行を出発点として、新たなウェブコンテンツの作成も予定している。本プロジェクトにおいては、国内にある外来の宗教、及び国外にある日本の宗教施設についての情報を収集した。それらは膨大な量にのぼり、とても 2 冊の刊行物の中に収められなかった。また地図情報のようなものは、書籍での表現にはかなり制約が大きい。なによりも縮尺が固定されてしまうという弱点がある。

そのようなことを考え、マッピングした位置情報をウェブ上で公開する仕組みを構築していく。ウェブ上での公開であると、変更が生じたときに対処がしやすい。これは地図情報だけでなく、刊行物、実践や儀礼の形態についての情報も同様である。RIRC の協定機関になっている宗教文化教育推進センター

（CERC）においては、すでに世界遺産のマッピングをウェブ上で行っており、多くのアクセスがある（https://sites.google.com/view/worldheritage）。これはもともと科学研究費補助金 基盤研究（B）「宗教文化教育の教材に関する総合研究」（研究代表者 國學院大學教授・井上順孝、2011 ～ 2014 年度）による研究成果として作成されたものであるが、これを継承して CERC の研究員がさらに充実したコンテンツへと展開させたものである。

これ以外にもウェブ上で展開した方がより使いやすく、わかりやすい情報があろう。どのようなことが可能かは、テクノロジーの発達に大きく依存するので、そこにも目を配りながら、良質な宗教・宗教文化に関する情報の研究や発信を継続していきたい。